

自立した学生との対話 教師冥利に尽きる刺激

くなくなった。」

学生「他の宗教が抑圧されたのだから、それに対する抵抗が起こって当然ではないか？」

私「日本には神仏混淆の歴史があり、また明治期のキリスト教は天皇制の問題に触れないことで弾圧を回避した。」

その学生は、なお納得がいけないという表情だった。私自身も、抑圧に対する甘受と抵抗という日欧の違いがどこから来るのか、その後も折に触れて考えるようになった。こうした学生との有機的な対話は、教師冥利に尽きる。

ブッシュの安保政策を議論

「OSIPP 政策フォーラム」が7月26日、OSIPP 棟で開催された。同フォーラムは今回で6回目。米・モントレー国際問題研究所のローレンス・シャインマン氏がブッシュ政権における安全保障政策、核政策について講演。A B M条約や地域紛争への介入などに関するブッシュ政権の姿勢について批判も含めた議論が交わされた。

【偶感】

ミャンマーは小乗仏教の国。町の至る所に溜色の僧衣をつけた老若男と杏色の衣の尼僧で溢れている。無数のバゴダの仏像の多くは、白色のベンキのポディーに血のように赤い唇、しかも寝そべっているものまである (reclining Buddha)。日本で黒っぽい仏像ばかり見てきた当方としては、当初違和感を禁じ得なかった。ヤンゴンから2時間ばかり走ったところにあるバゴアの寝釈尊は、全長五四m、高さ一六mの白い巨木に赤い唇、大きな目を見開いて屈託なく微笑えんでいる。蒸し暑い気候のもと、涼しい木陰で寝転がること以上に、この国では快適な過ごし方はない。釈尊が腕枕の横臥の姿勢で説教する姿は、人間くさくていい。しかし後光としてくるくる回る七色のイルミネーションが加わると、違和感を通りこして感動すら覚える。電気の発明後、これを思いついたビルマ人の想像力と創造力はたいしたもの。ビルマ仏教の専門家によると、釈尊の頭から七色の光が発していたと記されているパーリー語辞典に忠実に仕掛けをしているとのこと。昨年国営紙は、ミャンマー中央部で発掘された巨大な大理石に彫った仏像に関する記事を、発掘、ヤンゴンまでの運搬、彫刻、設置の模様、これを手伝う何万という善男善女の無料奉仕と視察に訪れる政府・軍幹部の動静と共に、一ヶ月以上も連日一面トップに掲載した。一体この情熱はどこから生まれるのか、その政治的、社会的意味は？ とまれ、あるヤンゴンの僧侶は、この大理石の仏像の手が施無畏印(左手の手ひらを前向きに、右手を下腹部に沿って掲げる)ポーズをとっていることを指して、左手は、そろそろ国民和解を達成して軍政はこのあたりまでにしてもらいたい、という仏陀の願いを表している」とつぶやいた。現在行われている軍政側とスー・チー女史の本格的対話が、仏陀の大願成就の方向に向うことを期待したい。(津守滋・駐ミャンマー日本国大使、元OSIPP教授)

在外研究レポート(上)

独・ライプツィヒ大学

木戸 衛一助教授

この9月まで、ドイツのライプツィヒ大学に客員教授として籍を置いた。ライプツィヒは、あの大作曲家バッハが晩年の27年間、トーマス教会のカントア(オルガン奏者兼聖歌隊指揮者)を務めた街である。折しも昨年は、彼の没後250年という記念すべき年で、国際見本市関連の催しも含め、1年中たいへんな賑わいであった。

私の所属した部局は、社会科学哲学部政治学科という。一般に、「客員教授」の称号を授かって、授業などの義務を負わないという話は別段珍しくないが、私の場合は、2000/2001年冬学期に週4コマ、2001年夏学期には、ハレ大学での非常勤を含め週5コマを担当した(ハレはライプツィヒから電車で30分。ライプツィヒがバッハの没した土地なら、こちらはヘンデルの生地である)。

授業はすべてドイツ語で行った。テーマは、講義が日本政治史、ゼミが日本の内政・外交や日独政治比較である。初回の講義には、60人弱の学生が顔を見せた。月曜日朝9時15分開始の授業としては、まずまずの人数といえるかもしれない。ところが、ゼミにはそれぞれ30人以上が押し寄せてきて、どうさばけばよいか一瞬呆然とさせられた。ちなみに学生たちの年齢は、20歳そこそこから日本でいう大学院クラスまで

様々であった。

ドイツの学生は、あくまで本人の意欲・関心に基づいて授業に出席する。やる気もないのに単位のために教室に入り、私語や居眠りをする光景はまず見られない。政治学専攻の学生の日本に関する予備知識は、残念ながらほとんどゼロに近い。それでも、授業で課題を与えると、それなりにまとまった報告ができるのは、学生としての主体的姿勢だけでなく、大学入学以前から自立的思考を育まれてきたことと関係しているように。

彼らの態度は実にはっきりしていて、つまらないと思えば、途中でも容赦なくぞろぞろ退席する(幸い私はそうした憂き目を見ずにすんだ)。逆に、授業が終わって「面白かった」と机をコツコツ叩かれると、これは結構嬉しいものだ。

ゼミが討論の場であるのは当然として、一方通行のはずの講義でもいきなり質問が浴びせられるのには、最初少々面食らった。しかし、そうした質問は教える側にとっても発見的・啓発的である。たとえば、日本近代における経済発展の遠因として、宗教対立の不在を挙げた際、一番前に座っていた男子学生がおもむろに手を挙げた。

学生「前に明治初期の廃仏毀釈やキリスト教弾圧の話をされていたが、それは、そもそも宗教対立があったことを意味しないのか？」

私「神道が国家宗教として特別扱いされていくなかで、対立は表面化しな